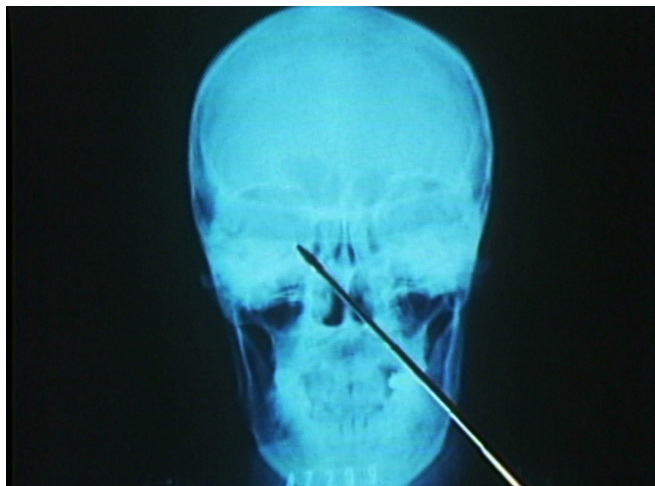


第8回日本産業映画コンクール奨励賞

この学術映画は、卒中、血腫、腫瘍を対象とした脳疾患の診断と検査を、当時において最新のレベルで示した作品である。



第1症例は高血圧の既往がある65歳男子。不意に頭痛を訴えて卒倒し、嘔吐と共に左半身の麻痺、そのまま深い昏睡におちた。この患者は脳出血という診断のもとに大学病院へ送られてきたが、脳波、超音波、髄液検査、脳血管撮影などが決め手となって脳梗塞と診断された。脳出血と脳梗塞は脳血管障害の双璧だが他覚症状は識別困難で、しかも病態の相違から治療法は幾つかの点で異なり、鑑別診断の精度が予後に大きな影響を与える。第2症例は50歳男子。転倒して頭部を打撲、頭痛、物忘れ、右下肢の軽い麻痺があり、一見して硬膜下血腫だが、右片麻痺と眼底のうっ血乳頭は脳腫瘍に起因すること多い。脳内出血による硬膜下出血を人工的に作る独創的研究もある。第3症例は45歳の女子。事故で頭部に外傷を受け、外傷性てんかんと診断され、治療を受けたが症状は悪化するばかりで、精密診断を依頼した。結果的には脳腫瘍の一種、髄膜腫で危うく一命をとりとめた。

脳腫瘍の基礎研究を見てみよう。ラットの脳組織の一部を摘出して組織培養を継代的に繰り返すと、グリア細胞の悪性化が形成された。癌原性因子による実験的脳腫瘍では、まず発癌性物質のメチルコラントレンを用いて、マウスに脳腫瘍を生成させる試みが成功した。次にニワトリに肉腫をつくるラウス・ウイルスでもマウスに脳腫瘍を発生させた。統計上、脳腫瘍が外傷性てんかんと誤診される場合は意外に多く、鑑別診断の決め手は脳波での異常波の検出、X線撮影での異常な骨肥厚像、超音波エコーグラムでの正中線のずれの検出、脳血管連続撮影等によって確認された。

記録
16ミリ
カラー／34分

- 企画
中外製薬株式会社
- 監修
東京大学医学部附属
脳研究所教授
時実利彦
- 学術指導
新潟大学脳研究所脳
神経外科学教室
慶應義塾大学医学部
内科・脳循環代謝研
究室
- 協力
東京大学医学部附属
脳研究所／新潟大学
医学部脳研究所神経
病理学教室／慶應義
塾大学医学部内科教
室・神経科教室／順
天堂大学医学部脳神
経科学教室／東京医
科歯科大学医学部第
3解剖学教室／京都
府立医科大学第1解
剖学教室／東京慈恵
会医科大学第1解剖
学教室／東京生化学
研究所

スタッフ

- 製作
村山英治
- 脚本・演出
吉見 泰
- 撮影
豊岡定夫
- 照明
佐藤 久
- 音楽
池野 成
- 解説
城 達也